



だ
っ
て



Press Release
プレスリリース

2018年

4月7日(土) ~

5月20日(日)



Yes, We love cats any time!

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会：大石・山本／広報：大庭・岩倉

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852

静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

tel. 054-273-1515 (代表)

www.shizubi.jp



いつだって猫展

🐾開催期間

平成 30 (2018) 年 4 月 7 日 (土) ~ 5 月 20 日 (日) 【39 日間】

休館日 / 毎週月曜日 (ただし 4 月 30 日 (月・祝) は開館)

🐾会場 静岡市美術館

🐾開館時間 10:00 ~ 19:00 (展示室入場は閉館の 30 分前まで)

🐾観覧料 (予定)

一般 1,200 (1,000) 円、大高生・70 歳以上 800 (600) 円、中学生以下無料

* () 内は前売および当日に限り 20 名以上の団体料金 * 障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則 1 名は無料

🐾主催等 (予定)

主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者 (公財) 静岡市文化振興財団、Daiichi-TV

後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会



作品画像はすべて個人蔵

【はじめに】

猫は古くから日本人の生活に寄り添い、可愛がられてきた動物です。その姿は物語や絵画にたびたび登場し、特に江戸時代後期には、「猫ブーム」が巻き起こり、浮世絵、歌舞伎、合巻本ごうかんぼんなどに多く取り上げられました。ときに美人と戯れる愛らしい姿として、ときに恐ろしい化け猫として、はたまたネズミを退治する頼もしい姿で、さらには福を招く縁起物として、猫たちは変幻自在に江戸の世界を駆け巡っています。

本展では、歌川国芳らによる猫を題材とした浮世絵を中心に、招き猫やおもちゃ絵、版本などを交え、江戸後期から明治にかけての「猫ブーム」の諸相をさまざまな角度から紹介します。本展により、私たちが猫に抱くイメージの多様性に改めて気づかされることでしょう。猫好きはもちろん、そうでない方も愛らしい江戸の猫たちの“とりこ”になること間違いなし。

いまもむかしも、私たちはいつだって猫に夢中なのです。



歌川国利「しんぱんねこ尽」(部分) 個人蔵

展示構成

- 第一章 江戸の暮らしと猫
- 第二章 化ける猫
- 第三章 人か猫か、猫か人か
- 第四章 福を招く猫
- 第五章 おもちゃ絵になった猫



歌川国芳「荷宝蔵壁のむだ書」(部分)



小林幾英「新板猫の勉強学校」(部分)

本展の特色

- ・江戸時代後期に起きた「猫ブーム」の諸相を、歌川国芳らの浮世絵や版本、招き猫など約200件余りで紹介します
- ・日本における人と猫との関わりを、**美術・芸能・文学などさまざまな角度から文化史的な視点**でご覧いただけます
- ・「おもちゃ絵」の体験など**お楽しみコーナーも多数設置**、美術愛好家だけでなく、愛猫家、子供から大人まで**幅広い方々にお楽しみいただけます**
- ・特別寄稿！人気猫マンガ家・くるねこ大和さんによる招き猫の先祖・**丸メ猫の誕生秘話の漫画**をパネル展示します



第1章

江戸の暮らしと猫

おんなさんのみや かしわぎ
源氏物語・女三宮と柏木
みす
猫が御簾をめくりあげ
不義の恋がはじまる

猫は少なくとも弥生時代には日本にいたとみられ、奈良・平安時代にはその稀少性から上流階級のペットとして愛玩されました。しかし江戸時代になると、猫は庶民の暮らしに溶け込み、鼠を捕まえる益獣として重宝されます。また魔を祓う縁起物とみなされる一方で魔性を持つ存在としても捉えられます。ここでは人々の暮らしにどのように受け入れられてきたのかを辿りながら「猫ブーム」が生み出される土壌ともいえるべき、江戸の人々が持つ猫のイメージを紹介します。

ようじゅつ
猫 VS 鼠！犬張り子に乗った鼠が妖術で猫を撃退



歌川芳艶「猫ねつみどうけかつせん」 弘化元-3(1844-46)年

ようざん
猫は養蚕の強い味方



渡辺周溪・貞齋泉晁「たけの休」 天保年間(1830-44)頃



歌川国貞「女三宮」 天保年間(1830-44)年頃

第2章

化ける猫

“化け猫”は江戸時代後期には歌舞伎や合巻本ごうかんぼん（絵入りの読み物）の復讐譚ふくしゅうたんに欠かせない存在として登場します。文政10（1827）年、歌舞伎芝居「独道中五十三駅」で三代目尾上菊五郎が化け猫の精を演じ大評判となり、以降「化け猫物」は人気演目として繰り返上演されました。このとき四代目鶴屋南北つるやなんぼくにより創作された、老婆が夜な夜な行灯の油を舐めるといふ化け猫像は、江戸時代の人々が猫から連想するイメージ—1章でみてきた踊る猫や女三宮、老婆に取り憑く猫等—が集約されたものといえるでしょう。

中央の老婆が三代目尾上菊五郎。背後には大きな化け猫が！



歌川国芳「日本駄右エ門猫之古事」弘化4（1847）年

手拭いを被って踊る化け猫
その評判は「大でき大でき」



歌川国芳「荷宝蔵壁のむだ書」嘉永元（1848）年

第3章

人か猫か、猫か人か

天保12～13（1841-42）年頃、江戸に大きな「猫ブーム」が到来します。浮世うきよ絵師・歌川国芳が次々に猫を題材とした戯画を版行、中でも団扇絵「猫の百面相」は「今世の中の流行」として紹介されるほど人気となりました。ブームは浮世絵だけにとどまらず、役者が猫の顔を描いた団扇を持って踊る歌舞伎「猫の所作事」ねこしよさごとは大評判。さらに国芳の挿絵による猫を擬人化した合巻本『朧月猫の草紙』おぼろつきねこ そうしはベストセラーとなり、猫ブームに拍車をかけました。ここではこれら天保期の猫ブームの背景や、猫ブームの立役者・歌川国芳について紹介します。

猫の団扇を使って恋占い！
よく見ると猫は役者の似顔絵



歌川国芳「二代目市川九蔵のあわしま庄太夫」天保12（1841）年

様々なよしよしを集めた「よしよし」
愛猫家・国よしよしは
猫をよしよし



歌川国芳「浮世よしづくし」弘化4・嘉永元（1847-48）年頃

当時評判！菊川国丸の曲鞠
国芳は猫を擬人化して描く



歌川国芳「猫の曲鞠」天保12（1841）年

猫集まって…猫になる！？



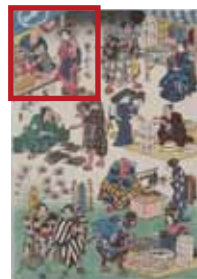
歌川芳藤「小猫をあつめ大猫とする」弘化4・嘉永元（1847-48）年頃

第4章

福を招く猫

片手を挙げ福や除厄をもたらす「招き猫」。記録によれば嘉永5(1852)年、江戸で「丸^{まる}猫^{ねこ}」ブームが到来します。丸^{まる}猫は、いわば招き猫の先祖。江戸・今戸^{いまど}周辺で作られた今戸焼の土人形で、近隣の浅草寺境内で売られていたようです。残念ながら「丸^{まる}猫」ブームは4~5年で終息したようですが、その後も「招き猫」は制作され、全国各地でさまざまなバリエーションが生み出されました。

全国各地の「招き猫」
約80体が大集合!!



福を「まるまるしめしめ」丸^{まる}猫販売中!



歌川広重「浄るり町繁花の図」嘉永5(1852)年
(部分拡大)

第5章

おもちゃ絵になった猫

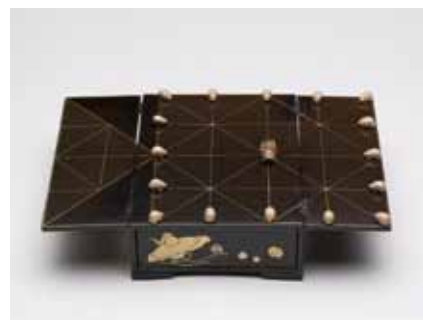
幕末から明治にかけて子ども向けの浮世絵「おもちゃ絵」が大量につくられます。芝居の一場面や生活風景を描いたもの、かるた、双六、なぞなぞ、切り抜いたり組み立てて遊ぶものなど様々ですが、猫を題材としたものも多く作られました。これらを見ればいかに猫が身近な存在あったかがよくわかりま

温泉の様子を描く



歌川国利「流行ねこの温泉」明治14(1881)年

捕るか追い詰めるか…
猫と鼠を題材にしたボードゲーム



「猫鼠十六むさし」明治

お楽しみ



猫の着せ替え人形で着物をコーディネート!

- 🐾 猫のおもちゃ絵体験コーナー設置!
- 🐾 さまざまな種類の招き猫が大集合!
- 🐾 招き猫絵付けワークショップ開催予定!



「おまかせ猫のいしや付」明監論銅



1、歌川国芳「山海愛度図会 七ツ>いたい 越中滑川大蛸」 個人蔵



2、歌川広重「名所江戸百景 浅草田圃西の町詣」 個人蔵



3、歌川国芳「猫の曲鞠」 個人蔵



4、歌川国芳「二代目市川九蔵のあわしま庄太夫」 個人蔵



5、歌川国芳「猫の当字 かつを」 個人蔵



6、歌川国芳「国芳もやう 正札附現金男 野晒悟助」 個人蔵



7、歌川芳藤「小猫をあつめ 犬猫とする」 個人蔵



8、招き猫 個人蔵

